

週刊すず辰^{たつ} (第329号) 平成31.2.12

2/25(月)は臨時休業

今週も、“すず辰(すずたつ)”が厳選しました農家さんの野菜(果物)たちをお買い上げいただきありがとうございます。ぜひおいしいもの好きなお友達・お知り合いにもお声かけください。お客様の輪が八百屋の力になります。

●今週のピックアップ商品○(来週もあります。)土曜営業しています

甘さ抜群、雪の下メークイン入荷。

厚沢部町の板坂さんから、雪の下に貯蔵していたメークインがやっています。雪の下で年を越したイモは、しばれるギリギリでイモのでんぶんを糖化させ、凍らないように濃度を高めます。結果、濃い甘さの越冬イモの完成です。特に雪の下にいたイモは絶妙な温度・湿度状態で、冷蔵貯蔵のイモ以上に深い甘みに。そのまま塩ゆでしたり、蒸かしたり、バターでソテーしてどうぞ。寒さの中で甘みが増しているのです、常温に戻すと糖は呼吸等で減ってしまいます。店でも冷蔵保管しておりますが、家庭でも『冷蔵』でお願いします。

季節限定の隠れた人気の品2つ。

“干し芋”は、天日干して作られたもので、入荷初めのこの時期は少しウェットな感じで甘みが強く人気です。

“煎り落花生”、豆の味がとにかうまい。気に入った方は2-3袋まとめ買いする勢いです。ちょっと他のと違います。ぜひお試しを。



▲すず辰のこぼれ話▽ 次の京とうふは2/12、14、16、19、21です。

すず辰マガジンがウェブで読めるようになりました。

毎週作成している店のチラシ「週刊すず辰」を元に、ここ3年毎年作成しているのが「すず辰マガジン」。vol.1は店の自己紹介号。ふつうの八百屋とどう違うのか、すず辰ならではの八百屋っぷりが凝縮されています。これが一番新しいお客さんを連れてきてくれる冊子。vol.2は、週刊すず辰で常連さんに好評の子育てネタだけを再編集。その名も「主夫な八百屋の子育て日記」。主夫目線の子育ての楽しみをいっぱい。そして、今年1月発行のvol.3は「子育て日記」の続編。QRコードの先のページのさらにリンクを選ぶと、それぞれPDFファイルで閲覧できます。周りの人に配りたい！って方は一報ください。冊子送りますので。

◆ちよっとまじめな話:「子どもの貧困」を考える◇

2/11、フォーラム「子どもの貧困を考えるin函館」にパネリストの一人として参加してきました。基調講演は、北大の松本伊智朗教授による、H29実施の函館の子どもの生活実態調査(市のHPで元データを見ることができます)の解説から。日本が海外に比べ、就労しても貧困率が下らない実態(非正規雇用やパート等、収入が低い形態が多いこと)、特にひとり親世帯でその傾向が強いこと、継時的な理由で食料や暖房を控えた経験のある世帯が少なからずいること、所得が低い世帯ほど保護者が健康でない傾向があること、その一因に病院の受診を抑制している現実があること、暮らしの中で立ち話する人、相談事をする相手がいらない人がおり、所得が低い層の方がその傾向が高いこと、所得の低い世帯の子どもの方が学校の勉強のわからない子の割合が高いこと、大学進学と親の所得との高い相関、行政サービスに所得が低い世帯の方ほど、知らなかったり、抵抗感があったり、利用の仕方がわからなかったりということがあることなどの実態が浮き彫りに。

「子どもの貧困」といいますが、要は「保護者の貧困」であり、また親世代の兄弟の数が減り、親族等の数もつながりも減っている中、身近な助け合いも減り、家庭(世帯)のマイナスが直接子どもに響いてしまう社会の現状がとてもよく見えました。松本教授も、「子育ての負担が家族(家庭)にのしかかっている点をもっと考えなくてはいけない。そして、子育てが昔に比べお金がかかるようになってしまっている」といったことも話されていました。その一方で、「お金がなくても、こどもにしわ寄せがいかないような社会のつながり、仕組みが必要だ」とのお話も。

パネリストの函館中央病院の石倉先生からは、出産に際し、母子や家庭の困りごとをきめ細やかに聞き取り、サポートする医療現場での取り組み。子どもの虐待に対する中で、児童相談所とのケンカに始まり、相互理解が必要と始めた、「チャイルドファーストはこだて(CFH)」の取り組みによる、病院・児相に留まらない、多様な関係者のつながりについて。特に、イライラしやすかったり、問題ごとを起こす母親こそ、なにかSOSを発しているとのお話はとても重く響きました。

《すず辰について》

鈴木辰徳(辰年:42歳。11.8.7歳の3児の父)がH23に開業。「野菜で笑顔を結ぶ」をモットーに、作る人と食べる人の笑顔の架け橋となるべく、素敵な農家さん、野菜果物のおいしさ楽しさをご提案。路面での販売“マルシェすず辰”を経て、H25/3/25念願の店舗オープン！マンガ“八百森のエリー”絶賛応援中！

函館市本通1-24-3(店舗) 店前・店横駐車可。
平日11時半・土曜12時半開店 17時閉店(日祝日休み)
TEL/FAX:0138-76-9865 メール: suzutatsu831@ncv.jp
HP: <http://suzutatsu831.com/>



まずは今度のCFHの集まりに参加してみたいと思いました。子どもの問題について、つながり、いっしょに考えることで、できることが見えてくると思っています。

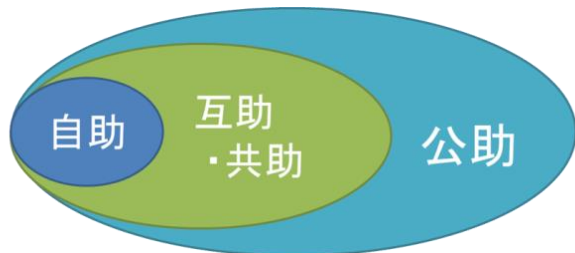
函館児童相談所の箭原(やはら)さんからは児相の現状として、子どもの障害相談について、虐待相談が多いこと。1人の児童福祉司に対し、仕事量がキャパの倍は来てしまっていること、そして社会として、地域の子どもの縁をどうつむぎ、育てるのかというお話を(小学校の先生ととある生徒のお話として)。

私の方からは、こども食堂の実態と、子どもとつながり寄り添うこと、いっしょに食事をする事の温かさ、自助(自己責任)だけに負わせず、公助(行政)のせいでにせず、互助・共助(民間のつながり助け合い)の大切さ、再構成が必要で、子どもの笑顔を中心とした街づくりを、といった話をしました。

子どものことを、「家庭」と「学校」に押し付けず、地域で受け止める、地域全体で子育てをする、そんな街づくりがいいとの話も。松本先生からも、「ついついより貧困な子はどこにいるのかと、貧困探しをしてしまうところがある。しかし、それは当事者を追いつめてしまうときがある。それよりも、困っている人を自然と受け止められる、誰もが幸せになれる、どんな街づくり、仕組みづくりをしたいのかという視点が大事だ」といった話があり、まさにその通りだなと思いました。

フォーラムの進行が押せ押せだった中、最後に2つのことをせっかくなので私の方から言わせていただきました。「経営者の人は給料を上げることを真面目に考えてほしい。都会と違い、地方都市である函館であれば、月給が5千円、1万円上がるだけで家庭にとっては大きなインパクトであるということ」、そして、「社会的動物とされる、イルカやクジラは家族や群れという集団で子育てをしている、なのに社会的動物のある意味頂点であるはずの人間が、今、各家庭に子育てを押しつけている。この不自然はすごく考えるべき」と。

フォーラム終了後、いろんな方と話を。次の動きにつながりそうなお話も。また調子に乗って動き回って本業の八百屋がおろそかになっては大変ですので、無理せず一歩ずつではありますが、いただいたご縁を大切に育てつつ、地域の子どもの対し、そしてある意味同じ子育て世代の人たちに対し、何かをそっと温かいものをお渡しできるようなことを地道に続けて行ければと思いました。



どれも欠けても困りごとが増えるので、バランスよく、それぞれが補完しつつ。

『海の哺乳類の子育ていろいろ』

海棲哺乳類の生態学者の女房がつぶやいていた内容がなるほどやったので、許可としてそのまま引用します。

“海棲哺乳類にとっても、母親が仕事(餌捕り)してる時、子どもどーすんだ問題はあって、

家(氷上)は安全だから一人で留守番ね→ウェッデル(アザラシ)、子どもたちみんなで遊んでなさい→オットセイ、

お姉ちゃんお願いね→ハンドウヤマッコウ(クジラ)、さっさと育てて一人立ちしてね→ズキン(アザラシ)、

母ちゃん貯金(貯脂肪)たっぷりだから子育て中は働かなくていいのよ→ゾウアザラシとかヒゲクジラ、

とかいろいろいます。

子育ての方法は、環境に合わせて体と一緒に進化してくんだけど、社会性を進化させてく方法もあって、ハンドウイルカやマッコウクジラとか、群れで生きる動物達はそうしているわけで。

(子どもが減って、兄弟も減り、血縁での助け合いだけでは難しくなっている昨今、)ヒトだって社会性のある動物なんだから、社会を変えればいいじゃん、と思うわけです。” ()内は店主が追加。

ついでに思うのは、少子化が騒がれているのに、子どもを産み過ぎるとお金かかって困ってしまうという現状はやはりおかしいです。単なる「お金持ち」とともに、「子たくさん=幸せに(なんなら豊かに)暮らせる」社会であるべきだと思います。

あと、よく「子はかすがい」といいますが、社会にとっても「子どもはかすがい」で、右の図ではないですが、子どもを中心に地域の大人がつながって、いろいろ動く、って絶対あると思うのです。

函館市の子ども関連部署は、「函館子ども未来部」。まさに『子どもは(社会の)未来』やと思うのです。



こども笑顔ミーティング実行委員会の資料から